

令和5年度

# 高知県高校生津波サミット

## 報告書

私たちから未来に紡ぐ ～高校生から広げる防災～



高知県教育委員会

# 目次

1. 黒潮宣言	1
2. 「高知県高校生津波サミット」の取組	
一連の取組	3
第1回学習会	4
第2回学習会	5
3. 令和5年度 高知県高校生津波サミット	
開催要項	6
参加校一覧	8
高知県教育長挨拶	9
尾崎正直衆議院議員挨拶	11
講演（東北大学大学院博士課程 雁部 那由多 氏）	13
実践校取組発表	27
グループ協議	29
アンケート結果・感想	30

# The Kuroshio Declaration

To commemorate the establishment of “World Tsunami Awareness Day” at the United Nations General Assembly, for the past two days, on 25<sup>th</sup> and 26<sup>th</sup> of November 2016, we have gathered at Kuroshio Town, Kochi, which is predicted to suffer from significant damage by a devastating tsunami the Nankai Trough earthquake may cause.

Natural hazards bring severe damage across the world, and many people face having to recovery their communities as a result. Although the diversities in countries and regions we live in may create differences in disasters caused by natural hazards we face and our approaches to disaster risk reduction, we all share the common goal of saving all human lives from disasters.

Today, as high school students from around the world, we have learned about what we should and can do to achieve our goal and to contribute to recovery of disaster affected areas.

We hereby declare that we will continue to make our best effort to understand the risks and effects of tsunamis, to pass onto our predecessors’ experiences and knowledge of disaster mitigation and risk reduction to future generations, and most importantly, to save people’s lives from tsunamis and other hazards.

- 1 We will learn.
  - We will obtain correct knowledge on the mechanisms of natural hazards, and the history of damage and disasters so that we can enhance our understanding of—natural hazards and their risks.
  - We will learn and study knowledge, skills, and actions that are useful for disaster risk reduction to save people’s lives.
  - We will learn how to face hazards and how to live our lives from people who have experienced such disasters.
  - We will utilize technology to enhance our learning.
  
- 2 We will take actions.
  - We will keep reminding people of the risk of disasters caused by natural hazards and constantly carry out educational activities to raise people’s awareness of disaster risk reduction.
  - We will recognize ourselves as people who offer help to others instead of people who receive help and we will actively participate in volunteer activities that consider others.
  - We will contribute to community development as members of the community through activities such as proposing actions for disaster risk reduction to the local community and national and local governments.
  
- 3 We will create.
  - By utilizing our acquired knowledge and skills, we will create useful tools and systems for disaster risk reduction for all kinds of people.
  - We will create global and regional networks of high school students to learn together and cooperate with each other so that we can live together with our friends in the world.
  - We will make use of our wisdom and vitality as future leaders for disaster risk reduction. We will not only revitalize the development of local communities, but also contribute to making our cities and countries more resilient to hazards for the sake of ourselves and children in the future.

While appreciating the blessings of nature and understanding the risks that nature sometimes brings about disasters, we will love and live with nature without fearing those risks.

November 26, 2016

High School Students Summit on “World Tsunami Awareness Day” in Kuroshio

# 黒潮宣言

国連総会において「世界津波の日」が制定されたことを記念し、私たちは、世界 30 カ国から、2016 年 11 月 25・26 両日、南海トラフ地震による甚大な津波被害が想定される高知県黒潮町に集まりました。

世界各地で自然災害が大きな被害を及ぼし、多くの人々が復興に立ち向かっています。

私たちの住む国や地域は多様であり、発生する自然災害や、防災に対する取組も様々ですが、すべての人々の命を守りたいという願いは同じです。

今日、世界の友と、災害から人々の命を守るために、そして被災地の復興のために、私たちは何をすべきか、また、どのような取組ができるのかを学び合いました。

このサミットを通じて、世界での津波リスクと津波による甚大な影響を認識し、先人たちの防災・減災の志を後世に伝える責務を引き継ぎ、津波災害をはじめとする災害から一人でも多くの尊い命を守るため、できる限りの努力をする決意をここに宣言します。

## 1 私たちは学びます。

- 自然災害への理解を深めるため、それらの仕組みや被害、過去の歴史を正しく学びます。
- 人々の命を守るため、防災に役立つ知識や技術・取組を学び、研究します。
- 被災した方々から、私たちはどのように災害に立ち向かい、どのように生きるべきなのかを学びます。
- テクノロジーを駆使して学びます。

## 2 私たちは行動します。

- 自然災害の記憶の風化を防ぎ、防災意識向上のための啓発活動を絶やさず行います。
- 助けられる人から助ける人となる自覚を持ち、人々の心に寄り添うボランティア活動を積極的に行います。
- 防災への取組を地域社会と行政に提案するなど、地域社会の一員として地域づくりに参画します。

## 3 私たちは創ります。

- 学び得た知識や技術、若者らしい斬新な発想をもって、あらゆる人の防災に役立つ物や仕組みを創造します。
- 世界の友と生きるため、地域や国を越え、共に学び、協力しあう高校生間のネットワークを創出します。
- 次代を担う防災リーダーとして知恵と行動力を発揮し、私たちと未来の子ども達のために、地域の活性化はもとより、災害に強い街や国づくりに貢献します。

そして、自然の恵みを享受し、時に災害をもたらす自然の二面性を理解しながら、その脅威に臆することなく、自然を愛し、自然と共に生きていきます。

2016 年 11 月 26 日

「世界津波の日」高校生サミット in 黒潮

## 「高知県高校生津波サミット」一連の取組

令和4・5年度実践校：岡豊、高知国際、須崎総合、大方、中村、明德義塾、高知  
 令和5・6年度実践校：安芸、山田、高知農業、高知海洋

自校での防災活動の実践

- 第1回学習会  
 6月18日(日)  
 場所：高知丸の内高等学校  
 参加：実践校11校 生徒32名 教員12名  
 内容：  
 ○講話「南海トラフ地震の被害と対応」  
 講師 南海トラフ海底地震津波観測網  
 整備推進本部  
 副本部長 高橋 成実 氏  
 ○講話「高齢者主体防災から、全世代  
 参加型防災へ」  
 講師 二葉町自主防災会  
 会長 西村 健一 氏  
 ○ローワーク・意見交流等

- 第2回学習会  
 8月20日(日)  
 場所：香南市夜須町ヤ・シィパーク  
 高知農業高等学校  
 参加：実践校9校 生徒32名 教員9名  
 内容：  
 ○フィールドワーク  
 ヤ・シィパーク避難タワー  
 ○講話「南海地震に備える」  
 講師 高知大学防災推進センター  
 客員教授 岡村 眞 氏  
 ○グループワーク・質疑

## 「高知県高校生津波サミット」(参集とオンライン方式を併用するハイブリッド方式により開催)

本年度の「高知県高校生津波サミット」は、令和5年11月11日(土)に高知県立ふくし交流プラザ(高知市)で開催し、41校から高校生及び教職員、関係者141名が参加しました。

今回のサミットでは、小学生のときに東日本大震災で被災された雁部那由多さんの講演、令和4・5年度の実践校の取組発表、グループワークを実施しました。

講演では中学生の頃から語り部活動を行っている雁部さんより「東日本大震災から未来を語ろう～地震と津波が“奪った”もの、“残した”もの～」と題して「東日本大震災を振り返って、現在の被災地と私たち、未災地を生きるということ」のお話をいただきました。震災が奪ったのは形あるものだけでなく、笑顔がなくなる、避難所での犯罪がおきる、震災による格差からいじめが生まれるなど、平常の人の心も奪っていく。東日本大震災から12年以上経ち、被災の記憶は失われ記憶は埋もれていく中で伝えていく活動を続けることの意義を語っていただきました。そして、この活動がそこに生きる人たちの未来を守る「行動」につながることを期待していました。

実践校の取組発表では、**防災食の食べ比べ、昼休みの校内放送での防災啓発、地域住民への防災訓練参加の呼びかけ、地域と合同の防災訓練、企業と連携した防災グッズの販売、自校での防災イベントの開催**など各学校の特色のある防災活動が発表されました。参加した県下の高等学校・特別支援学校からは「是非、参考にしたい」という感想が多く、今後の防災活動を実施するうえでとても参考になったようです。

グループワークでは3～4校の生徒が1グループとなり、講演及び取組発表から「高校生として私たちにできること」をテーマに話し合いました。「地域住民とスポーツで交流し、体力づくりと災害時の連携につなげてはどうか」「盲学校などと連携した訓練で、災害弱者のサポートを学ぶ場をつくれないか」という発表があり、積極的にアイデアを出し合いました。



雁部さんの講演



実践校の発表



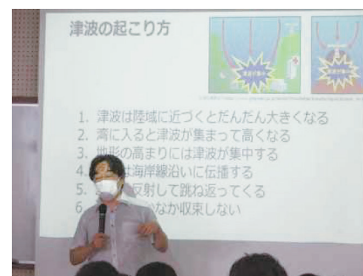
グループワーク

# 「高知県高校生津波サミット」第1回学習会

- 令和5年6月18日（日）10:00～15:30
- 高知丸の内高等学校
- 実践校生徒 32名 引率教員 12名 参加

## <内容>

- (1) 講話「南海トラフ地震の被害と対応」  
講師 国立研究開発法人 防災科学技術研究所  
南海トラフ海底地震津波観測網整備推進本部  
副本部長 高橋 成実 氏
- (2) 講話「高齢者主体防災から、全世代参加型防災へ」  
講師 下知地区減災連絡会副会長 二葉町自主防災会会長  
西村 健一 氏
- (3) 防災紙芝居「おじいちゃん教えて」  
朗読 澤本 恵子 氏
- (4) ロープワーク・意見交流
- (5) R4・5実践校の取組報告



防災紙芝居を聞いている様子



ロープワークに苦戦しながら  
取り組む



各校の浸水マップを見て、  
被害想定のお話し

## 第1回学習会 振り返りシートより（抜粋）

### ① 講話「南海トラフ地震の被害と対応」から

- ・南海トラフ地震が発生した場合、関西地方を中心に広範囲にわたって甚大な被害が発生すると予想されています。具体的には、地震による揺れや津波による浸水により、多くの建物が倒壊し、多くの人命が失われる可能性があります。また、交通機関やライフラインが途絶え、電気や水道などの生活必需品が不足する可能性があるということが学びました
- ・グループワークでは、高知農業高校さんとお互いのハザードマップを見ながら、想定される被害と避難場所について話し、近くの川や山が現段階で想定されていない事態を引き起こすのではないかとということまでしっかり議論できたと思う。今後は避難場所の見直しをし、避難訓練の回数を増やしていきたい。

### ② 講話「高齢者主体防災から、全世代参加型防災へ」「防災紙芝居」から

- ・防災の取り組みに参加しない若い世代が多いことを改めて知りました。自分の住んでいる近くに防災のイベントをしていたことがあり体験から、試食、スタンプラリーなどしていたのでこれに参加したり友達に勧めてみようと思いました。
- ・避難所開設訓練や防災イベントをしたいと考えているので、小学生に向けた紙芝居をつくるなどととても参考になりました。

### ③ 「ロープワーク・意見交流」から

- ・ロープワークでは、東日本大震災の時にロープ1本あれば助けられたというのを聞いて、災害用避難袋にロープを追加するきっかけになったので良かった。
- ・意見交流では、学校や地域それぞれの防災への考え方がみえて、とても参考になりました。自分の学校でも使えるものがあれば積極的に取り入れていきたいです。

## 「高知県高校生津波サミット」第2回学習会

- 令和5年8月20日（日）10:00～15:00
- 香南市夜須町ヤ・シィパーク周辺、高知農業高等学校会議室
- 実践校生徒32名 引率教員11名 参加

### <内容>

- (1) フィールドワーク（香南市夜須町ヤ・シィパーク避難タワー）  
講師：高知大学防災推進センター 客員教授 岡村 眞 氏
- (2) 講話「南海地震に備える」  
講師：高知大学防災推進センター 客員教授 岡村 眞 氏
- (3) グループワーク「フィールドワーク・講話を通じて、自校（個人）の防災活動に生かしていきたいこと」



避難タワーで説明を聞く



岡村先生の講話



今後の防災活動に生かしたいことを意見交流

### 第2回学習会 振り返りシートより（抜粋）

#### ① フィールドワークから

- ・大雨の日、雪の日でも避難訓練を行おうと思った。海の近くに建てられた避難タワーは初めて見て、一時的な避難場所だとしてもなにも物がない所とかものすごく怖いと思った。
- ・災害が発生した際には、すぐに避難することが重要です。しかし、避難する際には、安全な避難場所を事前に確認しておくことが大切だということがありました。
- ・山沿いに逃げるときにはそこにある木を見ると良いということを知って驚きました。なぜ、木を見るとよいかというと木の年輪が多いとその地盤が強いからそこは土砂崩れが比較的しにくいからだそうです。また、私は、防災で現地に行くという機会があまりなかったので今回行って見て現地に行くことでわかることがあると思いました。

#### ② 講話・グループワークから

- ・いつか来るって考えるんじゃなくて明日絶対来る！って日頃から考えながら生活していきたいと思った。同じ地区で同じ避難訓練をするのは面白くないので、別の場所（地区）に行って避難ルートを確認して逃げトレを使って避難する活動をしたいと思った。
- ・先生の講話では、災害に関する統計データなどを紹介しながら、自然災害の危険性をわかりやすく解説してくださいました。また、グループワークでは、災害時の行動について話し合い、自分自身の備えを見つめ直すことができました。災害時の行動を家族や友人と話し合い、自分自身で行動できるようにすることが大切だと思いました。
- ・食料や水なんて探している暇は無い、という言葉に衝撃を受けた。避難してからのことを考える暇はなく、地震発生時は今という瞬間を生き抜くことだけ考えようと思った
- ・津波が来ること地震が来ることを予想して、例えば家の設計などの工夫など自分にできることをしていきたいです。また、私はあまり体力に自信がないので今から体力をつけていきたいです。今回は自分が知らなかったことをたくさん知りました。

# 令和5年度「高知県高校生津波サミット」開催要項

## 私たちから未来に紡ぐ～高校生から広げる防災～

### 1 趣 旨

平成28年11月、本県の黒潮町で日本を含む世界30カ国の99校、361名の高校生が一堂に会し、『世界津波の日』高校生サミットin黒潮」が開催され、若き高校生たちが防災リーダーとしてそれぞれの国や地域で活動していく決意を表明した「黒潮宣言」が採択されました。その黒潮宣言に基づき、今後、高知県の未来を担っていく高校生が防災リーダーとして成長し、活躍することを目的に開催します。

2 主 催 高知県教育委員会

3 日 時 令和5年11月11日（土） 10：00～15：30

4 会 場 高知県立ふくし交流プラザ（〒780-8065 高知市朝倉戊 375-1）

5 開催方法 参集方式と Zoom によるオンライン方式の併用で実施

6 参加者 高知県内の高校生及び教員、学校教育関係者、防災関連機関担当者 等

### 7 日程及び内容

時 間	高知県立ふくし交流プラザ 2階多目的ホール
9：30	受付開始
10：00	開会 教育長 挨拶 尾崎正直衆議院議員からのメッセージ
10：20	講演 「東日本大震災から未来を語ろう -地震と津波が”奪った”もの、 ”残した”もの-」 東北大学大学院博士課程 <sup>がんばるゆた</sup> 雁部那由多 さん ※グループ協議あり
12：00	昼食
13：00	実践校の取組発表（3校×12分）
13：40	休憩
13：50	実践校の取組発表（4校×12分）
14：40	休憩
14：50	グループ協議 「各実践校の取組から、高校生として私たちにできること」
15：20	閉会 代表生徒挨拶

### 8 その他

- 昼食は会場内で食べることができます。近隣に飲食店等が少ないため、昼食は各自でご持参ください。
- 悪天候等により、やむを得ず中止する場合は、高知県教育委員会事務局学校安全対策課ホームページに、前日の17時までに掲載します。

9 問い合わせ先 高知県教育委員会事務局 学校安全対策課 学校安全担当（上岡）  
TEL:088-821-4533 FAX:088-821-4546



## 令和5年度 高知県高校生津波サミットについて

### ■実施日時

日時 : 11月11日(土) 10:00~15:30(受付9:30~)  
場所 : 高知県ふくし交流プラザ 2階多目的ホール  
開催方法 : 参集方式とZoomによるオンライン方式  
※なるべく参集するようお願いいたします  
講師 : 雁部 那由多(がんべ なゆた)さん

### ■実施方法について

- ・各学校の参加者数は8名以内(8名を超える場合は学校安全対策課と要相談)。
- ・新型コロナウイルス感染症も5類に移行したことから、**参集での参加**を推奨します。
- ・実践校について実践委員は全員参集、実践委員以外の参加も可。
- ・特別支援学校は教職員のみ参加も可とします。
- ・東部、西部から大型バスを運行します。生徒・引率教員がご利用ください。

	運行ルート
東部	【7:00 発】室戸高校→【8:00 着 8:10 発】安芸高校清和校舎→【8:50 着~9:00 発】高知農業高校→【9:45 着】ふくし交流プラザ ※15:40 より逆ルートで運行
西部	【6:50 発】宿毛工業高校→【7:10 着~7:20 発】JR 中村駅→【7:35 着~7:45 発】黒潮町役場→【8:35 着~8:45 発】窪川高校→【9:45 着】ふくし交流プラザ ※15:40 より逆ルートで運行

### ■講師紹介

がんべ なゆた  
雁部那由多さんは現在、東北大学大学院博士課程の1年生。宮城県東松島市大曲小学校5年生のときに東日本大震災を経験しています。地震が起こった当日津波に遭い、自分の家も全壊、避難所や仮設住宅での生活も体験しました。

中学生の頃からご自身の経験を語るようになり、現在でも震災時に体験したことを様々な人に語る「語り部」として活動されています。平成29年度 児童福祉文化賞推薦作品を受賞した本「16歳の語り部」では、語り部三人のうちの一人が雁部さんです。

また、平成28年に黒潮町で行われた「世界津波の日 高校生サミット」にも参加されています。

今回は高知県高校生津波サミットの講師として

- ①東日本大震災を振り返って(過去)
- ②12年後の被災地と私たち(現在)
- ③未災地(みさいち)を生きるということ(未来)

という構成で、高知の高校生が地震や津波を現実的に想像が可能な出来事に「身近化」できるよう講演をいただく予定です。

### ■令和4・5年度実践校(発表校)

岡豊高校、高知国際高校、須崎総合高校、大方高校、中村高校、高知高校、明德義塾高校

### ■令和5・6年度実践校(令和6年度発表校)

安芸高校、山田高校、高知農業高校、海洋高校

## 令和5年度「高知県高校生津波サミット」参加校一覧

### 【実践校:11校】

#### 令和4・5年度実践校

1	岡豊高等学校
2	高知国際高等学校
3	須崎総合高等学校
4	大方高等学校
5	中村高等学校
6	高知高等学校
7	明德義塾高等学校

#### 令和5・6年度実践校

8	安芸高等学校
9	山田高等学校
10	高知農業高等学校
11	高知海洋高等学校 (オンデマンドで後日参加)

### 【参加校:31校】

1	室戸高等学校
2	中芸高等学校
3	嶺北高等学校
4	高知東工業高等学校
5	高知東高等学校
6	高知工業高等学校
7	高知追手高等学校
8	高知追手前高等学校吾北分校
9	高知丸の内高等学校
10	高知北高等学校
11	伊野商業高等学校
12	春野高等学校
13	梶原高等学校
14	幡多農業高等学校
15	窪川高等学校
16	四万十高等学校

17	宿毛工業高等学校
18	宿毛高等学校
19	清水高等学校
20	山田特別支援学校
21	山田特別支援学校田野分校
22	高知江の口特別支援学校
23	同 国立高知病院分校
24	盲学校
25	高知ろう学校
26	高知若草特別支援学校
27	同 子鹿園分校
28	日高特別支援学校
29	同 高知みかづき分校
30	同 しんほんまち分校
31	中村特別支援学校

## 高知県教育長 挨拶

令和5年度「高知県高校生津波サミット」の開催にあたり、一言、ご挨拶申し上げます。

本サミットについては、ここ2年、新型コロナウイルスの影響で、参加人数に制限を設けて開催せざるを得ませんでした。本日はこのように多くの高校生の皆さんに集まっていたいただき、また、衆議院議員・元県知事の尾崎正直先生のご参加を賜り、盛大に開催できますことを大変嬉しく思います。

さて、今から7年前の平成28年11月、黒潮町において日本を含む世界30ヶ国361名の高校生が一堂に会し、初めて「『世界津波の日』高校生サミット」が開催されました。

そして、災害から一人でも多くの尊い命を守るため、「学ぶこと」「行動すること」「創る（創造する）こと」の3つを、それぞれの国や地域において防災活動を行う決意を「黒潮宣言」としてまとめあげました。

高知県では、この宣言に基づき、未来を担う高校生の皆さんが地域の防災リーダーとして活躍することを目指し、「高知県高校生津波サミット」として、学習会や被災地訪問、「『世界津波の日』高校生サミット」への参加、防災士の資格取得など、一連の取組を進めております。

今年度は11校の実践校と50名の実践委員の皆さんが中心となって、学校や地域での防災活動に積極的に取り組んで下さいました。

本日のサミットは、そうした実践校における取組の成果を共有し、防災活動について共に考え、学び合う場として開催するものです。

その中の声で、「集まった仲間と防災の話をする中で、身近にある川や山においても想定されていない災害が発生するのではないか、その時にどのように行動するかといった、新たな議論をすることができた」とか、「防災の取組に参加しない若い世代が多いことを知り、より積極的に自分の地域の防災活動に参加したり、防災の輪を友達に広げていったりしたいと思った」といったような声も聞かせていただきました。本日のサミットは、そうした実践校における取組の成果を共有し、防災について考え、学び合う場として開催するものであります。

本サミットに参加した皆さんが、防災への意識を一層高め、南海トラフ地震へ

の備えはもとより、毎年のように発生する大雨による水害や土砂災害など、全ての自然災害に対して、大切な命を守るために一人ひとりがどのように判断し、行動することができるのか、その実践力を身につけるとともに、各学校における防災活動の推進に役立てていただきたいと考えています。

さらには、安全で安心な生活や社会を実現する安全文化の創造を担う人材になっていただくことを切に願います。

この後の日程では、東日本大震災当時、小学生で実際に被災をされ、その後、語り部活動を行っている雁部那由多さんのご講演をはじめ、実践校による取組発表、グループに分かれての意見交換が予定をされております。きっと、皆さんにとって実りある一日になるものと期待をしております。

先ほど、雁部さんと少しお話をさせていただきました。当時小学校5年生、津波が押し寄せて、自分が学んでいる校舎の2階部分まで来た、その光景を自分は目にした、そういったお話もいただいております。実際、私もその当時は学校で校長をしておりました。テレビ画面でその光景を見たときには、身の毛がよだつというか、こんなことがこの世の中にあるのかといったような気持ちになったことを今でも覚えています。そして、高知県にも来るかも知れない、そのときにはどのようにして子どもたちを守ったらいいのか、あるいは地域の方々を受け入れたらいいのか、そんなことを考えていた次第です。

災害地域は人ごとではない、自分自身の命を守る、家族の命を守る、友達の命を守る、そんなことを思いながら学んでいただきたい、そんなふうに思います。

結びにあたり、ご指導くださった各学校の先生方、ご協力いただいている保護者の皆様、また地域の皆様方に感謝を申し上げますとともに、ご参加の皆さんの、今後のますますのご活躍を心からお祈りし、私からの挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしく申し上げます。

令和5年11月11日

高知県教育長 長岡 幹泰

## 尾崎正直 衆議院議員挨拶

「高知県高校生津波サミット」の開催、心からお慶びを申し上げます。そして皆さん、今日までさまざまな形で準備をしてこられたところだと思います。その成果を遺憾なく発揮していただき、また、多くの学びを持てる機会に皆さんお互いに競い合っていたいただければと思うものです。

私がこの「世界高校生津波サミット」をやらせていただいたときに、本当に思いました。世界各国、30か国の国々から、多くの高校生の皆さんが来ておられたわけですが、この津波・防災に向けて、世界各国の皆さんが大変な意識を高めて勉強しておられる、そして夜の交流会では、おそらく言葉が本当にどこまで通じ合ったのか、その言葉の壁を越えて、本当に国籍の壁を越えて、多くの皆様が瞬時に仲良くなっておられた、本当にすばらしい機会だなと思ったところです。

これを1回限りで終わらせるのはもったいない、ぜひ高知県では「高知県高校生津波サミット」を続けていこう、また「世界高校生津波サミット」にも皆さんの代表に出ていただいて、このすばらしい経験を共有していただきたい。私はそのときの知事だったということもありまして、こういう形で毎年挨拶をさせていただいているところです。

この津波対策、地震対策のなかで、恐らく一番大事なことは、皆様お一人お一人の意識ということなのだろうと思います。東日本大震災の後、高知県では津波対策としてさまざまなことに取り組んでいます。例えば、津波避難タワーは、高知市のなかで今120基くらいあるはずですが、避難路、避難場所というのも1,545か所あります。これは、いざとなったら逃げる場所があるという、そういう状況を確認しようということで、5分以内にはそれぞれ皆逃げられる、何らかの形の避難場所があるという状況を作り出しているところです。

しかしながら、多くの皆さんが実際に避難タワー、避難場所に向かって地震発生直後にすぐさま逃げ出すということがなければ、現実問題として多くの人々の命が救われることはないです。地震において、すぐさま逃げるということ、そのことをいかにお一人お一人がそれを徹底できるか。願わくば多くの皆様を巻き込んで、一緒になって避難をする状況を作り出していくことができるか、そういうことが本当に大事なのだと常に思います。

すぐさま逃げるということについて、毎年、アンケート調査というのを取らせていただいています。津波からの早期避難率というのを把握しようと考えて参りました。早期避難率、東日本大震災の頃、恐らくこれは20パーセントだっただろうと言われていています。20パーセントだと、東日本大震災ではそうであったように残念ながら多くの方が亡くなります。その後、さまざまな啓発活動を続けて参りました。70パーセントくらいまで、この早期避難率というのは向上したはずですが、しかしながら、70パーセントまで向上して、どうしても超えないのです。これを100パーセントまで引き上げることができるか、そして実際に揺れが起こったときに、本当に実践できるかと、皆さんの日頃からの意識、自覚、そういうことが本当に大事だと思うところです。

日本には近年、この百有余年、大きな災害が3つ、地震が3つ起きていることは、皆さんもご承知の通り。関東大震災では、一番大きな被害が出たのは火災です。地震の火災です。そして、神戸の大震災では、一番の被害が出たのは揺れによる圧壊、圧死ということであります。東日本大震災は、津波によって多くの被害が出ました。一番近い災害にどうしてもとらわれてしまうことが多い。しかしながら、津波だけとは限らないことは、皆さんもお分かりのとおり。耐震化を進めて、揺れから身を守らなければなりません。地震の後に、私のところは津波がないからと置いていても、今度は地震火災が起こるかも知れません。そして、揺れ、その後に津波がくるかもしれない。いずれのタイプの災害に対しても、しっかり備えておくということが極めて大事なことです。決して1つのパターンにとらわれることなく、ありとあらゆる可能性が起こりうるのだという前提でもって、ぜひ、さまざまな準備を進めておいていただきたいと思うところです。

今日、このサミットを通じて、多くの皆様方の学びがありますことを、心から願っているところです。ちなみに、一所懸命調べて、勉強して、その成果を発表して、ディスカッションをするという経験、このことは、この防災のこののみならず、皆様の人生にとって、非常に多くの経験を得られることと思います。

それでは、本当に今日は皆様方、ぜひ、皆様の成果、大きく上がっていかれることを、心からご祈念申し上げまして、ご挨拶とさせていただきます。

令和5年11月11日

衆議院議員 尾崎 正直

## 講演

### 演題 「東日本大震災から未来を語ろう」

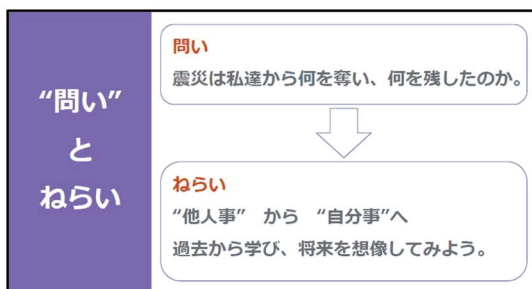
—地震と津波が"奪った"もの、"残した"もの—

が ん べ な ゆ た  
東北大学大学院博士課程 雁部 那由多 氏

●東松島市から高知市まで来るのに半日以上かかります。大変なんです。でもそれでもなぜ私がここに来たのかっていうのは、実は理由があります。前にも来たことがあるんです。第1回ですね。「世界津波の日」高校性サミット in 黒潮という2016年になります。この時は私、高知市と黒潮町に何日間かいたのですけれども、英語で発表しました。この当時高校生でしたが、自分で言っている内容がちんぷんかんぷんくらい難しい英語を使いました。津波が起きて、私たち大変な苦しみをしました。何とか今、街を立て直してみました。震災から5年経ったその日にそのことをお話したら、世界中のいろんな人から、どうやって立て直したのか教えてほしい。私たちの所はこれから津波が来ると言われている。あるいは、津波が来たけれど、どうしたらいいんだ、とかそういうことの「答え」を求めに来ていた国の人がたくさんいた。同年代の高校性たちです。未だに交流が続いています。



●震災は私達から何を奪い、何を残したのかということを中心にしました。この



問いに答えるために、これをやってほしいんです。“他人事”から“自分事”にすること。過去から学んで将来を想像してみること。災害のときに、“自分事”として考えてみよう。でも、皆やるのは、災害の想定の中に、「自分」と、そして「大切な人」を入れていない。だから、何かあったときも体が動かない。もし地震が来たら、

もし津波が来たらというところに、**自分と大事な人を入れて考えてみたら**、自ずと行動は変わってくると思います。

この東日本大震災は、大規模複合災害と呼ばれています。地震が起きて津波が来ましたが、それだけじゃないです。気仙沼市では火災が起きました。港の船や車が全部燃えました。仙台空港も水に浸かりましたし、石油プラントが燃え出しました。地震、津波だけの被害じゃないです。そして、全ての災害に共通することとして、大きな被害が一つあります。それは、**人の心を傷つけていく**ということです。地震が来て、津波が来ました。そこに誰も住んでいなかったら、誰も傷つく人はいませんし、分からない。単なる自然現象になります。でも、

人がいる場所に地震や津波が来たから、人の命が亡くなり、そして悲しむ人が出てきました。複合災害の複合の中には、人も入っているということをぜひ忘れないでください。

### 東日本大震災を振り返って（過去）

●実は、3月11日の2日前、3月9日にも地震がありました。そして、津波注意報が出て、集団下校をした記憶があります。この地域では大体、おおよそ注意報だったら津波は来ないだろうという認識がありました。実際、来た試しが一度もなかったからですね。そして11日、何事もなかったかのように3月10日、11日と小学校に登校し、授業を受けていました。2時46分、その学校の体育館も翌々日くらいの卒業式に備えて、紅白幕が張ってある状態でした。そこでバスケットボールの授業を受けていて、後、十数分で授業が終わっていざ帰宅、それくらいの時間だったんですね。その時に地震を経験しました。今までだったら、グラッと揺れが来れば、ああ地震だって分かるんです。最初の0.1秒くらいで地震だと気付くと思います。東日本大震災のときは、地震かどうかが分かりませんでした。それは、何故か。最初に起こったのが揺れではなくて、地鳴りだったんです。体育館の中にごうっという音が響きはじめました。ブルーインパルス音かなと思いました。よく上を通っていくと、ジェットエンジンの音がお腹に響くくらい鳴り響きます。最初、それに似ていた。でも、いつもと違うことがある。ブルーインパルスは上を通り過ぎると、音が小さくなっていくんですよ。でも、この時は、音がだんだん大きくなってきました。バスケットをしていた手を皆が止めたその時に、ついに揺れが始まりますね。その揺れというのは、いつものような、横にガクンと揺れるものではなくて、縦の揺れです。下から突き上げるような揺れです。下から突き上げる揺れによって、まず始めに僕らはバランスを崩して、皆、転倒しました、その場に。「えっ」と思いました。十数秒、縦に揺すられた後、ピタッと一瞬、シーンとなって、その直後に横揺れが来ました。今度は、地震だと分かります。いつもの揺れより激しい、何十倍もの揺れです。まるで自分が巨人の手の上に乗せられて、思い切り振られているような、そんな感覚でした。

体育館、照明の設備がありました。次々に落ちてくるんです。横揺れの時に落ちてくると、10メートルくらいの高さから、200キロくらいの重さがある照明がドカドカと私たちに向けて落ちてきます。それが直撃して足を怪我した子もいます。私は幸い、当たりませんでした。その間何をしていたか、逃げよう、逃げようと思っても、逃げられない。地面が揺れているので、立てない、動けない、自分の意図した方向とは違う方向に身体が向けられてしまう、そんな状況でした。ただ、地震だけで終われば、多分、東日本大震災の被災地は、3日から1週間で元通りになったと思います。というのは、地震が元で崩れた建物とか、そういうのは、このへんの地域ではほとんどありませんでした。この様子だったら、まあ、明日、明後日は学校が休校かな、でも、3日後くらいからまた始まるかな、それくらいの感覚だったんです。地震だけだったらです。でも、そうはいかなかった。津波です。



●実は地震があったあと、津波が来るまで、30分から40分くらいの間隔がありました。これ、実は高知県では2分で来るところがあると言われていていますね。東日本大震災では、それが比較的長かったんです。私がいた大曲小学校には、おおよそ45分から50分くらいして、津波が到達しました。その間、何をしていたか。学校から家に帰ったんです。津波というものが何か分かりませんでした。訓練したこともない。学校でやっていた避難訓練は、火事と地震だけ。つまり、地震のときは何と何をすればいいか分かりました。

私がいた地域では、サイレンは一切鳴りませんでした。だから、津波警報が出ていることを知るべきがほとんどなかったんです。電気が止まればテレビも見られません。情報を得る手段がありませんでした。テクノロジーから一気に切り離されたのに、それに気付けなかった。一部のお父さんやお母さんは、携帯の中についているワンセグという機能のテレビを見て、津波が来るから危ないと気付いて学校の先生に伝えていたようです。ただ、それでもかなり時間がかかりました。その40分から50分のあいだに、私自身もお母さんが慌てて学校のほうに迎えに来て、私と4つ下の妹を連れて、学校から200メートル離れた自宅に戻ったんです。自宅まで戻ったときに、自分のお父さんが仕事の関係で持っている無線機、消防無線機といいます。このスイッチを付けたら、隣町に20メートルの波が来て、今、人が流されているという情報が入ってきました。女川町というところの情報でした。これはまずいよね、という話になって、学校にまた避難をすることになります。

●実は学校に着いてすぐ、僕は校舎の3階に上がったんです。だけれども、津波が来たときには、校舎の1階、この部分にいました。それは何故か、単純な理由で、今でこそ考えられないんですけど、上履きと外履きを履き替えるためです。学校の校舎の中で上履きを履いてバスケットの授業を受けていて、そのまま避難をしてまた自宅へ帰り、学校に戻ってきました。もうボロボロです。割れたガラスを踏み抜き、釘が刺さり、割れたガラスの粉が上履きのあいだから入って、それが靴下と僕の足の皮膚のあいだですり合わされて、血がにじむ、そんな状況だったので、前の日に買ったばかりの靴を取りに、この校舎の玄関に戻ったんです。その時、3時45分。津波が来ることになります。津波が来るといっても、僕が用事のあったのは玄関の中なので、上履きを替えてそのまま校舎の上へ上がればいいじゃないか、僕も当時、そう思っていました。ふと学校の校舎の外の方を見たら、私のほうに



向かって避難してくる大人の人たちが見えました。矢印のほうを見て下さいね。海=大曲浜の方向と書いてありますが、この方向を見てみたら大人の人がありました。授業の時間中だったので、校舎の玄関は鍵が閉まっています。こちらのほうの玄関は、児童だけしか使わなかったの、鍵が

かかっています。何故分かるかという、ガシャッとドアノブを下に下げるとロックをされるドアを見たことはありませんか。あのドアで、全部斜め下に下がっていたうえに、なおかつ鍵が内側から閉まっていたので、僕が開けてあげなきゃいけないのです。その人たちは入れないんですね。校舎の中には地域の人がすでに目一杯避難してきていました。なので、僕も躊躇せずその人たちを入れるために、この玄関の一番右側のところを開けて、赤丸の位置に立って待っていたんです。その時に、津波を見ました。

●どんな津波だったか。逃げてきた人たちは、画面の奥の方、海からの津波は、今、緑色の幕のようなのが見えますけれども、駐車場のほうからじわじわと迫ってきました。そして、この津波、高さが測れないくらい低かったんです。最初の津波は海から 2.3 キロも遡ってきたので、勢いなんてものはない。イメージは、バケツに水を入れて、バシッと撒いたみたい。津波に足がついても、命の危険を微塵も感じない程度の津波でした。僕が最初に抱いた感想は、「あ、水が来た」と。「なんだ、これが津波か」というものでした。何メートルの津波が来ると騒いでいたけれども、何だ、来ないじゃないか、と思って安心しきって、その場で待つことにしました。逃げてきた大人の人たち、あのあたりに非常口があるんです。そこから入ってきて、およそ、津波の黒いところと交差しているところがありますね、あのあたりで津波が靴底に着く、びちゃびちゃとなるくらいに浸かったんです、大人の人たちはそこらへんで走るのをやめたんです。ああ、間に合ったって感じだった。それで、もう少し靴底をびちゃびちゃと黒い津波に濡らしながら、私のところに来て、「いやいや、助かりました」、なんて声をかけられた記憶があるし、僕も「大変でしたね」って言いながら、扉を開け続けてそこに立っていました。その時、別のほうから津波が来たんですね。



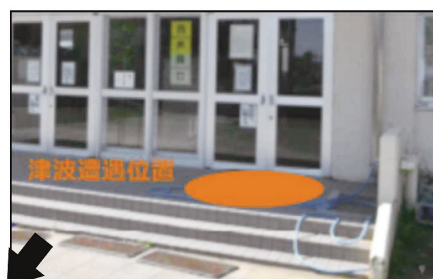
●川は、300 メートルしか実は離れてないんです。石巻港というところからこの場所まで川がずっとつながっています。定川という川です。大曲というのは、実はこの川のくねった地形が由来なんです。川から来た津波というのは、堤防もなく、しかも勢いそのままに、しかも川の幅がどんどん狭く、高さは高くなっている。勢いも強くなる。そんな津波が、この場所であふれ出しました。海から 2.3 キロ離れた小学校には、じわじわと津波が最初にやってきましたが、川からはえらい勢いの津波が流れてきました。今、これは震災後の写真を使っていますが、真っ白い堤防ができています。何故、そうしているか分かりますか。それ

は、東日本大震災でこの堤防が全て流されたからです。だから、あの橋を境にして、元の形になっていますけれども、津波が超えちゃったところだけ新しい。この直し方を見ると、どこから津波が来たか、よくわかりますね。300メートルくらいしか離れていな



い、しかも数メートルの高さの堤防を乗り越えて壊して来た波です。すごい勢いでした。それは、学校の校舎の別の方向からやってきました。僕が立っていた位置からすれば、後ろ、海じゃないんです。海じゃなくて内陸のほうから大きな津波がやってきました。これが、全然当時考えられませんでした。校庭に停まっている車は、当時、車で避難してきた人たちの車です。よくよく見ると、車の方向がてんでバラバラに、なんか渦を巻いています。一番左の車は右側を向いているのに、多くの車は左を向いているんです。この学校の校舎の校庭で、津波が渦を巻きます。そして、どこに津波が集まったか、私が立っていた玄関です。

●私が立っていた場所と、大人の人たちが避難してきた場所に、津波が集まったんです。海からの津波と、川からの津波がここに集まってきました。ここで何が起こったか。それは、逃げてきた大人の人たち、5人くらいいたのですが、その人たちが川から来たえらい勢いの津波によって流されていきました。私自身は、何とか助かった。その代わりという、大人の人たち5人は、道路のほうに津波と流されて行って、行き止まりのところに積み重なって亡くなりました。命が分かれたんです。学校の校舎と校庭、ただの波だったら泳げばいいと思うんですが、無理ですね。へドロがたくさんあります。これ、造船所からあふれた重油も含まれています。そして、車です。僕も車にはねられかけました。何故その場所に居続けたのか。それは、川から来た津波の流れが速すぎて動けなかったからです。ドカン、バキバキと音がした瞬間に、僕はもう足首が濡れていました。私が立っていた場所は、少し高い場所。そして、赤丸のちょうど右側にコンクリートの壁があるんです。あれによって、津波の直撃を防ぐことができたんです。大人の人たちが流されたのは、ちょうどこの矢印のあたりです。たった1メートルしか離れていないのに、川から来た津波、最初の津波はおよそ60センチくらいだったというふうに言われています。その波が、僕のところに来たときには、ちょっと高い位置にいて、しかも壁のところだったので、30センチくらいに減り、勢いは減っています。だから、立てたんです。僕は、壁に捕まって、なんとか流されないようにしました。



けれども、大人の人が立っていた場所は、60センチをもろに食らいます。大人の人でも60センチの津波を受けてしまったら、立っていることはできません。つかまるものもありませんでした。僕が津波に流されそうになりながらも、大人の人たちのほうを、パッと振り向く、あの水道の壁に捕まって、右後ろを振り向いたら、大人の人たちが皆流されていく、その瞬間でした。大人の人たちの一番前にいた赤いシャツを着たおじさん、そのおじさんは、自分に向かって最後、手を伸ばしてきたんです。多分、私も手を伸ばし返せば、明らかに届きました。



した。震災後、何度も試しました。絶対届く位置です。だけれども、その時僕は何をしたか。判断ではなく、決断をしました。この手をつかみ返さないという決断です。

それはどういうことか、当時の僕の感覚からそのまま言葉にすると、人を見殺しにするという決断です。私が手をつかめば、つかんだところで助からないのは分かっています。だって小学校5年生、こんなに小さい、しかも、ものすごく華奢な体をしている小学校5年生が、津波に流されかけている大人の人腕をつかんだところで、どうなるのか。小学校5年生にも想像がつかますよね。だから、あの手をつかんだら、僕も流されるんだ。ここで死ぬんだということが直感的に分かります。今でもその直感は、正しかったとは思っています。ただ同時に、人を見殺しにするという決断を迫られました。手を伸ばし返さなかったことが、結果的に私を、生きながらえさせるようになります。大人の方は手を伸ばしながら、そのまま胸のほう、頭のほう、最後に手の指先という形で津波にのみ込まれていなくなりました。黒い津波なので、どこにいるか、スッと消えたらもう分からないんです。僕もその光景を見て、徐々に津波の高さも増してきていたので、このコンクリートの壁から手を離しました。その時、何が起こったか。大人の人たちが流された方向に、一緒に流れるものかなと思いました。でも、そうはならなかったんです。自分で空けておいた扉、その中に津波がすごい勢いで流れ込んできました。僕は、津波によって校舎の中に押し流されました。校舎の中の下駄箱に身体をどんと打ち付けられて、勢いが収まったものだから、校舎の中で、何とか、命からがら校舎の中の玄関から階段を上がり、上にあがって助かることができました。

●この後3日間ずっと津波が引くまで探し続けました。何とかあの大人の人たち、どこかで助かっていないか。避難所になっているから、どこかにいないかなと思いました。いませんでした。震災から3日目、自動車の折り重なっていた光景、この車を隅々まで探して、その下をずっと見て、別の人の遺体を見つけたり、それからずっと奥の方まで行って、行き止まりのところに、見覚えのある服を着た遺体が折り重なっているのを見つけました。それが、私が見殺しにした人だったということは、もう、皆さんご想像がつくと思います。見殺しにした上に、第一発見者になりました。小学校5年生のときの経験です。ただこれは、まぎれもない現実でした。私の小学校のときの体験ですが、決して特別な体験ではなくて、こうい

った体験を、その場にいた人は皆、もれなく、例外なくしていたようです。僕が流されかけた光景は、校舎の上にいる人が、窓から身を乗り出して見ていたそうです。上から見ていた人は、別の光景を見ていました。校庭の前のほうから赤ちゃんを抱えて走ってくるお母さんがいた。でも津波に追いつかれて、二人とも流されてしまった。ただそれを、自分たちは安全なところから見ているしかなかった、と後から言っていました。学校の校舎、校庭、普通は皆がわいわい笑いながら大きくなって出ていく場所なのに、人の命が失われる場所に、その日変わりました。大曲小学校に避難した地域の人も含め、それから当時一緒に勉強していた同級生、私の同級生も何名か亡くなりましたが、この学校に避難した同級生は、例外なく人の死と向き合わざるを得ませんでした。それが災害で、一番怖かったところだと思います。いくら町が壊れても、こんな光景になっても、皆助かったなら、「ああ、大変だったね」の一言でなんとかなると思います。だけれども、人が亡くなってしまったということは、取り返しがつかない出来事が起きたということです。取り返しがつかない出来事が起こると言うことは、何をしてもいいか、次の一歩が分からなくなる。そして、助けられなかった、なんで私が生き延びちゃったんだろう、というような、罪悪感を抱くことになりました。震災から数日間の避難所の雰囲気はものすごいものでした。何もしていない、あるいは、助けられたかもしれないのに、命を助けられなかったという思いを抱いた人が、たくさん、生きるために動き続けました。それが、東日本大震災の実相だと僕は思っています。

## 12年後の被災地と私たち（現在）

●東日本大震災が12年前に起こりました。こんなことがありました。はい、みなさん知ってください。それでは意味がないですね。東日本大震災は被災地の中の、あのちょっとした空間の中で、どんなことが行われてきたかというのを、紹介したいと思います。

さて、3.11 その日から学校という場所は、どんなふうに復旧したのでしょうか。僕たちは何をやったか。私たち笑っていたんです。東日本大震災でボロボロになった校舎。1階が使えない。2階の教室も一部崩落しているような校舎。4月10日から授業があります。4月10日まで、その学校は避難所だった。多くの人がそこで生活をしました。その時、私たちはど

んなふうに思っていたのか。震災前のように、腹の底から笑うことはできませんでした。なぜか。いたはずの同級生がいないのです。小学校5年生からいつの間にか6年生になっていました。私たち修了式もなかったし、修了証書なんか流されて、来てみたら、机がない。28個の机が23個になっていました、私のクラス

<p>2-1 過去を見る 東日本大震災を振り返って</p> <p><b>3.11その日から、学校が元に戻るまで</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・私たちは「笑っていた」⇨ 非日常を楽しんだ</li> <li>・状況を楽しみながら、同時に不安感も覚える</li> <li>・<b>家族・友人の死に直面する</b></li> </ul> <p><small>自分の置かれた状況を見たままに・感じたままに処理するほかなかった。 ⇨スクールカウンセラーさん、支援をくださる方からこぼれ落ちる子供達</small></p>
---

は。隣のクラスも同じような状況でした。でも私たちは、またその校舎で学び始めるのです。

非日常を楽しみました。でも状況を楽しみながら、不安感も覚えていました。どう考えても、**どういうふうに振る舞っていいか分からない**からです。家族や友人の死に直面をして、そんな精神状態で過ごしたことを覚えています。

もう一つは、自分の置かれた状況というのを、見たままに・感じたままに処理するほかなかったです。今学校に通っているというのは、そのまま避難所から学校に通うということ、周りとは違うということを受け入れるしかなかった。スクールカウンセラーさんや支援をくださる多くの方々から、私たちはこぼれ落ちていくようになる。なぜか、それは、被災者であるということを認めたくなかった。私よりをよっぽど被災した人がいるのに、私なんか支援を受けていいのだろうか、相談なんかできるのだろうか。隣に座っている友だちは家がない、避難所から通っている。だけど私は家がある、でもつらい。そんな状況がクラスの隣の席、前の席で当たり前に起こっていたのです。

さて、じゃあそんなクラスの被災状況ってどうだったかという、例えば、避難所で犯罪被害に遭った人もいました。震災そのものというのは、自然に対しての脅威。でも震災が起こった後、あの時どんなことが起こったかという、今度は**人から被害を受けること**だ

**あった**。犯罪被害、これは物を盗られたりというもの、傷つけられたりということもありました。その中には、女性が襲われたりすることもありました。私の同級生です。未だに公になっていないはずですが。それは大人も含めて相談できないからです。

#### クラスの被災状況

- ・避難所で犯罪の被害に遭った人も
- ・盗難や物の破損は当たり前 ⇨ 誰も信じられない
- ・親や先生を含む、周囲の大人の姿にショックを受ける

なんで相談できないと思いますか。知っている人だからです。知っている人が地域に今も一緒に生きているからです。こんなに苦しい状況あるかと思いました。私も何度も何度も、「それはおかしいんじゃないか」と思いましたが、それでも「ここで生きていくしかないから、なかったことにするんだ！」なんて言っていました。

そこから起こったことは何か。誰も信じられない。震災の後、避難所で「みんなで協力して頑張りました。じゃあこれからも頑張っていきましょう」って、そんな簡単な世界では、残念ながらありませんでした。人によっては、目の前にいる人が変わってしまうことだってありました。私たちが今まで普通に接していた地域の大人や先生だったのに、見たこともない表情を見せたり、表情を失ったりして、そして誰も信じられなくなっていく。そんなことも起こりました。親も先生も含んで、**周囲の大人の姿にみんなでショックを受けた**ことを覚えています。

●みんながみんな被災者だったのかという、校舎の中で人が亡くなって、津波でしばらく休校になって避難所になった。そんな学校に通っている人でさえ、自分は被災者でないと思っている人が多かった。

それは自分よりももっとつらい思いをした人がいるから、被災者じゃない、なんていうふ

うに言い聞かせていたような気がします。被災したと思っている人の方が少数派だったのです。この人たちは、自分も含め、私も含め、被災組と呼びました。なぜなら、家がない。避難所から通っているのに教科書がない、ランドセルがない。弁当も持ってきていない。給食始まるまでは、お弁当だった。お弁当を作って持って来られない、作る設備もないから。じゃ何をするか、前の日の晩に避難所に配られたお弁当のバックを残しておいて、それを持って来る。そんなことをしたんですが、そうじゃない人も結構いた。内陸の方の津波が来ていない所から来る人たちは、電気あります、ガス使えます、水道も通りました。普通にご飯が食える。弁当もあるし、それから服、何日も同じ服を着て来る子と、毎日洗濯した新しい服を着ている子がいる。教科書、コピー用紙をクリップで留めたものを使っている人たち、片や新しい教科書の人たちがいる。文具、ちびた鉛筆を支援物資でもらったものを全部短くなって、最後の最後になくなるまで使いました。でもその一方で、新たな鉛筆を使える人たち。何が見えたか、**格差**です。今までクラスの中で、そういうものはほとんど見えませんでした。だって、みんな同じ給食を食べて、同じ時間に登校してきて、同じような色のランドセルを背負って来る。それが東日本大震災で、きっぱり分かれた。できる子、できない子。持っている子、持っていない子と分かれました。そしたら、同じ話ができるわけない。テレビが見える子と見られない子がいるわけです。そうすれば、話題も合わない。やがて、それがいじめや、**クラスの分断につながっていきました**。私が経験した中で、震災そのものの次に恐ろしかったのは、人の変わりようです。それは最初に複合災害と言いましたが、災害の怖い面の一つじゃないかなと思います。**災害が変えるのは、町の姿や物の姿だけじゃなくて、人の姿**だと思います。

#### クラスの被災状況

被災者：そうでない者 = 3 : 7 くらい (自認)  
被災した人の方が少数派 ⇒ 自らを「被災組」と呼ぶ  
弁当、服、教科書、文具の全てに**格差が見えてしまう**

●さて、12年8か月経ちました。私、震災前の時間よりも震災後の生きている時間のほうが、いよいよ長くなってしまいました。震災後の時間の方が長いということは、あの震災の日が、どんどんどんどん遠くなっていくような間隔に陥っているということです。

震災から数年経って語り部の活動を始めたって最初言いましたよね。でも、それはなぜ数年が必要だったかという、ずっと目を背け続けてきたからです。あんな光景もう2度と見たくない、触れたくもない、思い出したくもない。だけれども、受け止めなければいけない光景だった。あそこで起こってしまったことを、見たくない知りたくない聞きたくもないって目をつぶってしまうことは簡単です。なぜなら、それは進学をして自分の家を出て行けば、簡単にそのことから離れられるからです。遠く離れて去ってゆく光景になってしまうときに、ああ、これが風化なんだなと思いました。震災の話をみんながワッと忘れてしまうのではなくて、忘れたくて忘れていってしまうのですね。

「津波が“奪った”もの」というタイトルを付けましたが、今日は6つくらい挙げてきまし

た。まず、「命」です。それから「安心」  
ですよね。その地域で安心して暮らせ  
る、家に帰ってきたら安心する、あの  
安心です。それがなくなりました。「生  
活」、がらりと変わりました。お金が  
使えなくなりますし、親から笑顔が消  
えるわけです。「財産」、自分が集めて  
きた物や、それから自分の友だちや人



間関係、そういうものがなくなりました。そして、一番大きかったのが「信頼」。頼れる人  
がいなくなりました。震災や津波が奪ったものというのは、目に見えるもの、例えば、「あ  
っ、学校がなくなったんですね」「砂浜が全部消えちゃいましたね」そんなことは一目見れ  
ば分かる。けども、目に見えないものがある。言葉にして話してみないと分からないもの  
がある。それが、ここに挙げたような目に見えないものなんです。これをも奪っていったの  
が、東日本大震災なんじゃないかなあというふうに思っています。

なぜ東日本大震災の話をするのか。それは、風化していくさなかでも、話し続けなければ  
いけないところがあるからです。なぜ今、東日本大震災なのか。次が今この瞬間かも  
知れないからです。僕は今、一生懸命当時の記憶を引っ張り出して、こうやってしゃべって  
いますけれども、なんで東日本大震災のことを伝えたいかというのと、それは単純に、みな  
さんが同じ目に遭ってほしくないというのも一つ。それから、自分の中の記憶を絶やしたく  
ないというのが一つなんです。自分の記憶を語りながら、つむぎ直しています。語りながら聞  
いてくれる人がいて初めて、自分の記憶が継がれていく、そういう感覚を覚えています。な  
ので、自分のためにやっている部分もすごくあると思いますね。みなさんも、もしかしたら  
別の機会神戸の方とか、それから別の災害の経験者の方から、語りを聞く機会があるかも  
知れませんが、語りというのは語られるだけではなくて、聞かれなければ継がれていかな  
いということを、ぜひ覚えてほしいと思っています。

震災の時に見たのは、目の前で人が流されて目の前で人がいなくなり、表情が消えていく  
同級生や大人たちの姿でした。テレビでもたくさん流されました。今でも11日になると津  
波が襲ってくる映像がある。あれって実は3月11日の一瞬を切り取ったできごとにすぎな  
いのです。被災地に暮らした僕から言えることは、あの日あの場所のあの写真の中に暮らし  
ていたのも、あの写真の中には様々な表情をした人間がいるということです。そうして、そ  
の人間というのは、みなさん自身も含まれるということです。どんなに地形が変わった写真  
や物が壊れた写真を見て、ショッキングなものを受けたところで、他人事のようにしか感じ  
られないのは、あそこに人間の表情がないからじゃないでしょうか。ぜひ、この5つ以外に、  
みなさん丸をざっと書いて、奪ったものって何だろうって、ぜひ自分でも考えてみてくださ  
い。落書きしてくださいね。想像することは、大事です。



## 未災地（みさいち）を生きるということ（未来）

●最後です。「未来を創る 未災地を変えるまなざし」と付けました。何か格好いいのを付けてきたなと思いましたよね。実は「未災地」というのは、私がつくった言葉ではないんですが、それでもみなさんに伝えたいと思ったので、持ってきました。

**未災地**、この言葉だけは絶対に覚えて帰ってほしいと思っています。今、高知県は被災地ですか？どうでしょう。災害では被災者は被災地と言います。だけれども、高知県は被災地か、高知市は被災地か、室戸は、足摺岬の方は、宿毛はって聞かれたら、どうかかなと思うんです。それは被災地が未災地に戻っていくからなんです。東京で1923年に関東大震災があり、今年100年です。兵庫で1995年にもありました。今年でもう30年近く経ちますね。



2011年に宮城にも震災がありました。はどうでしょう。東京は今、被災地ですか。100年前、関東大震災でものすごい人数が亡くなりました。火災が起きました。今、「被災地ですか」と言われたら、多くの東京に住んでいる人は「えっ」と思うと思います。それは自分が被災者でもないし、被災の経験もしていないからです。被災地だった場所は、やがて被災地でなく未災地に

戻ります。未災地は、被災者経験をやがて忘れていき、もう一度被災地になることもあります。今日、話の中を通じて、風化という話をしてきました。風化というのは、僕の中では記憶を忘れてしまうことではありません。どうでしょう、みなさん。あれだけの体験をしながら、あんなにつらい経験をしたら、簡単に忘れられますか。忘れないですよ。でもなぜ震災から、たったの10年程度で風化するかというのが、叫ばれているんでしょう。実はこんな感じではないかなと思っています。

●あの震災が発生した点から、どんどんどん私たちは新しい時間が生み出されていきます。新しい時間を積み重ねるといことは、新しい人たちが生まれてくるし、経験を持っている人たちはいなくなる。震災から12年8か月経って、私の出身の大曲小学校には、被災を経験した先生や児童、もう1人もいません。児童はみんな震災後に生まれたのです。あと3年経てば中学校までそうなります。地域の子どもたちは全員が、被災者ではない。もう3年経てば、高校を出ます。てんでバラバラに散っていきます、全国に。どうでしょう。どんどんどん被災地が未災地になっていくという感覚が何となく伝わったのでしょうか。さらに大人の人たち。あのとき70、80だったおばあちゃん、もういないという人もいます。経験者は確実に減っていく。それが、例えば、あと50年、60年したらどうでしょうか。私が70、80のじいちゃんになった時に、小学校5年生の子どもが体

験した話が、70、80のおじいちゃんしか持っていない。じゃあ、僕が死にました。さらに10年経ちました。震災後の子どもたちしかいなくなりました。たった数十年から100年くらいで、被災地が未災地に戻ってしまう。これを食い止めなければいけないよね、**風化を食い止めよう**というお話なのです。私たち自身が震災を忘れるのではなくて、地域そのものが体験や経験を失っていくこと、それが風化であって、これを食い止めるためには、地域やみんなで記憶を受け継いでいかなければいけません。

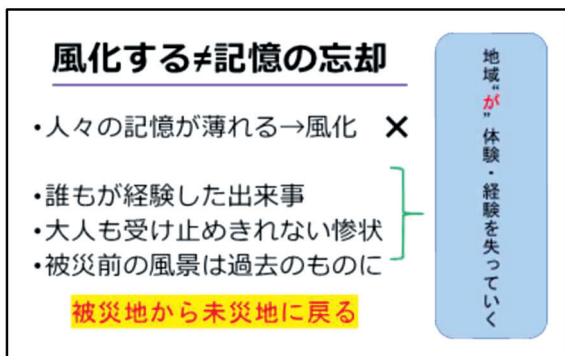
被災の記憶は、失われていきます。そして、記録も埋もれていきます。

では、限られた時間と資源の中で、未災地に何を残せるだろう。今、被災地だけでも、将来未災地と呼ばれてしまうような地域に何を残せるだろうという私なりの答えの一つが、語り継いでいくことです。これは、例えば僕は学校でやったりするというのは、一番効果的なんじゃないかなと思っています。

10年くらい前です。2014年に、はるか先の未来に残すために、僕は語り継ぎの活動というのを、当時何とか始めました。2014年の3月11日、みやぎ鎮魂の日シンポジウムで初めて語るんです。ここに別人みたいな僕が、端で座っていますけど、中学生の時でした。この時、ある言葉に出会います。まだ、語り継ぎで未来に残すということも思っていないです。震災のことも吐き出せていない時期に、こんな言葉に出会いました。「震災の体験は、持っているだけならただの嫌な思い出になります。でも、伝えることで人の命を救う価値のある情報になるんです」、というふうに言われました。持っているだけなら、つらいし、あんまり自分の中で持ちたくもない情報なのです。だけど、「言葉にして誰かに伝えるということは、それを次の人を救う命の価値のある情報になるんだよ。それは今日の前にいる人の限らず、どこか知らないところで言葉を聞いてくれた人にさえ伝わるんだよ」と言われたんで、ハッとしました。僕は、写真や文字で残すのも大切だと思いますが、それ以上に**人の言葉で残す**こと、これにこだわりました。



そして、例えば、僕なんかあちこち行って、こうやってお話をしています。けれども、何が理想なんだろうと考えた時に、こんなことがいいのではないかと思いますね。「語り継ぎ」というものがあります。僕が今やっているのは、「語り」であり「語り継ぎ」です。どうということかと言うと、「あの時大変だったね」の会話から「地震の時、ここは危ないぞ」とか「昔、この駅は橋脚から落ちたんだ」「この辺りは何もなくなったんだよね」という、日常の時間に溶け込んでいる語りが見つかりました。神戸の六甲駅という所で耳にした言葉で



した。誰とも知らないおじさんから声を掛けられまして、「95年よりも後の生まれか」と聞かれました。「はい。99年です」「いいか、この駅はこの橋脚が折れて、全部ズドンと下に落ちたんだよ。それだけ知って見て」と言って、そのおじちゃん去って行きました。これこそ語りの再生産ですね。僕は現に語り部というのは、あまりいないんじゃないかと思っています。語りができるなら誰でもやっている、そして語り継いでいいということです。日常の時間に溶け込む、こういう語りの最先端こそが、地域のなかに記憶を残しとどめることに一番効果があるというふうに思います。

●語り継ぐということは、被災当時の人の声を生き生きと受け継ぐことです。これは、皆さんにも、できるのではないかと思っています。今日私の話、ぜひ語り継いでもらえませんか。誰にでもいいのです。隣にいる友だちでもいいし、隣の高校の人でもいいし、家族でもいい。今日ぜひ誰かに語り継ぎを1人でいいからしてみてください。一言でもいいからやってみてください。それが僕の願いです。

「語り」がいつ役に立つのかというと、答えはとても単純で、私が出した語りみたいなもの、これはあくまでも材料です。何の意味もないです。それをみなさんは、こねて考えて自分のものにして、**行動が生み出されたときに、初めて語り部の意味が生まれます**。例えば私は震災の時、私はこう言いますね。「粉ミルクがなくて困ったんです」「ここにはかつて津波が来たんですよ」僕はここまでの話をしました。体験したことを話せるだけです。だけれども、みなさんの方で、「じゃあ、あらかじめ買っておこうか」とか「今も危険かどうか、ちょっと調べてみようかな」と言って、スマートフォンを手に防災マップを調べてみたりする、なんてことが起これば、それは語りから行動が生み出されたということになります。この行動こそが大切なんです。語りの記憶をいつまでもとどめておくのではなくて、こっちの行動するという方をぜひ残してください。

### 「語り」はいつ役に立つのだろう？

答えはとても単純

#### 「語り」から「行動」が生み出されたとき

- ・「粉ミルクがなくて困った」 ⇨ あらかじめ買っておこう
- ・「ここにかつて津波が来た」 ⇨ 今も危険か調べてみよう

●語りを「語り」のまま終わらせないでくださいね。語りの先には「行動」があって、そしてその行動の先にみなさんの「未来」があるということを忘れないでいただきたいと思っています。私がみなさんにぜひ伝えたいと思っているのは、東日本大震災のことではないと最初に言いましたね。東日本大震災は、あくまで材料にしてほしいと思っています。その材料を使って考えて、自分だったらどうするか、この町だったらどうするか、将来どんなふうな町を作っていくのか。そこでどんなふうな生き方をするのか、そんなところまで自分の視野を広げてほしいと思っています。

東日本大震災から12年8か月経ってお話しをしましたが、今でもあの被災地はあります。そして、震災という時間の中にいます。みなさんもぜひ関心があったら、被災地に行ってみ

てください。そして、いろいろなものを持ち帰ってきてください。

もう一つ。僕は被災地の人間として、高知を含めみなさんから助けられてきました。だから、今度災害があったら僕は必ず助ける側に回ろうと思っています。手を差し伸べられたので、今度は手を差し伸べ返します。みなさんは、ぜひ安心をして僕の手を取ってほしいと思っています。震災のない、地震が起きないということがベストではありますが、残念ながら世の中は、そうはいかないというふうなのが現実だと思います。その時、どんなふうに生き抜くのか、自分のベストは何なのかということ、ぜひ模索してほしいなというふうに思っています。

**語りを「語り」のまま終わらせない。**

**語り継ぎの先には「行動」がある。**

**行動の先には「未来」がある。**

**まずは、一歩先の「行動」に踏み出そう**



グループワーク



最後に生徒から質問

# 実践校 取組発表

令和4年度から2年間自校の防災活動に取り組んできました。その発表内容の一部を紹介します。※各校の取組発表の詳細は学校安全対策課のHPに載せています。

## 岡豊高等学校

3. R5年度の取組について

**取組2 防災委員会による活動**

昨年度中止となった防災総合訓練を実施  
(内容) 防災体験プログラム (5限)  
避難訓練 (6限)



令和5年度 防災委員会での取り組み



2年間の評価と今後について

■2年間の評価  
テーマ: **防災意識の向上と地域との連携強化**

防災意識の向上 ⇒ まだまだこれから  
地域との連携強化 ⇒ 一歩前進した

■今後  
避難所のシミュレーション、防災リーダーの育成、この活動や取組を次世代に繋げる



## 中村高等学校

**NDSDについて**

2016年にできた中村高校の自主防災組織のこと


**N**akamura なかむら高校  
**D**isaster 災害  
**S**elf 自主的に  
**D**efence 守る

生徒主体で様々な活動を展開し、**防災意識の高揚や避難所運営マニュアルの策定**など実践的な活動を行っている!


R5 高知国際高校の防災イベントに参加  
『こくさい ぼうさい いらっさい』

ミニ講演会を実施

- ・防災クイズ
- ・ランタンづくり
- ・新聞スリッパ



ランタンづくり



避難所生活などで、電気がないときに、身近なものでランタンを...

## 高知国際高等学校

**私たちが目指すイメージ**

- ・高知国際高校が高知県一の安全な避難場所になっている
- ・防災委員会(生徒会)の活動が活発化している
- ・生徒会を中心に、学校全体で自主的に防災に取り組んでいる

**防災ワークショップ内容**



- 1 参加者体験(12月17日だけのメインイベント)
- 2 HUG(避難所運営)ゲーム(12月18日だけのメインイベント)
- 3 Go! Go! 情報品屋稼働!
- 4 ノンクイズ
- 5 パレードマップ作り
- 6 お菓子作り作り
- 7 ミニ講演会
- 8 防災カルタ

**ブースでの出展内容**

- 教える側にまわることで新たな発見があり、新しい知識が得られた。
- 人に教えることで自分の学びも深められた。防災の解釈が広がった。



## 明德義塾高等学校

・月に1回、ロングホームルームの時間を使って全校放送しています。



・1回10分程度で、テーマを絞って放送することで、日常的に防災について考えるきっかけになることを目的としています。

**たんぽぽラジオ**



**地域での合同訓練**



**最後に**

防災委員の活動を通じて防災士の資格を取った先輩や、女性防災の活動に参加して社会的弱者にやさしい社会実現に貢献したい。地域の活性化についてもっと勉強したいと進路を決めた先輩もいました。

防災について留学生にも伝えるように工夫をする中で、日常でも活かせる国際意識を高めることもできました。

実践校に選んでいただいて得たものを土台として、防災の活動を継続していきたいと思えます。

ご清聴ありがとうございました。

## 高知高等学校

- 令和4年度から実践校として取り組みスタート
- 取り組みのテーマ
  - 災害への備え（避難）
- 本校の防災上の課題
  - 生徒、教職員の防災意識の向上に向けた取り組みが不十分
- 2年後のゴールイメージ
  - ・生徒、教職員の防災意識の向上
  - ・生徒、教職員の安全を確保する取り組みの充実
  - ・地域、企業との連携強化

### (1) オリジナル非常持出袋販売



### (2) 学校周辺防災マップの確認



## 須崎総合高等学校

### 活動内容

- (情報収集) 6月21日 須崎市多ノ郷地区防災連絡協議会に出席  
「近隣住民の方々の願いを聞く」
- 70歳代の各自主防災組織の地区長さんたちの切実な願い  
自分たちの親世代(80歳以上)は、避難することを諦めている。
- ↓  
後期高齢者を助けたい！

### 実践内容②

地域住民へのチラシ配布  
挨拶  
コミュニケーション

### 実践内容②(配布の様子)



## 大方高等学校

### ◆ 活動報告

- 1 防災day
- 2 避難路検証
- 3 特別支援学校との交流
- 4 JICA国際協力機構との連携
- 5 まとめ

### 1 防災 day ポリ袋調理



95歳の高齢者の方と一緒に避難

## 発表の様子



学校安全対策課はこちらから  
※各校の発表内容の詳細がわかります

## グループ協議

### 「各実践校の取組から、 高校生として私たちにできること」

※ 4校（7～8名）を1グループにして10グループで協議

各グループから出た意見

- ・ 体験を通じた学習
- ・ 語り継いだことを生かして、地域と交流を行っていく
- ・ 避難訓練の意識を高めるために、他の災害についても考え直す必要がある
- ・ 学校同士のかかわりを増やす
- ・ 避難所運営を生徒でやってみたい
- ・ 自分たちで防災についての動画を作成し、発信
- ・ 地域の人たちと一緒に避難訓練
- ・ 二次被害を想定して、備えたり話し合ったりしたい。
- ・ スポーツを生かした町づくりを通して地域の人たちと交流し、同時に防災意識を高める
- ・ 自分の住んでいる地域のイベントへの参加
- ・ 盲学校をはじめ、特別支援学校の人たちとの協力や助け合いによる、避難訓練を行う例）車椅子の押し方やサポートの仕方
- ・ 特別支援学校との交流（サポートや関わり方がわからないので）
- ・ 場所の特徴にあった、防災マップをつくりたい



## 高知県高校生津波サミットアンケート結果・感想

参加した生徒・教職員等からアンケートをとりました。(118名から回答)

設問	結果
サミットの内容は、学校での防災活動をすすめるうえで大変勉強になった。	3.8
サミットを通じて、防災について深く考えることができた。	3.9
サミットの内容は、今後の学校での防災活動に役立つと思う。	3.8
本日のサミットに参加して良かったと思う。	3.8

※ 4 : よく当てはまる    3 : 当てはまる    2 : あまり当てはまらない  
1 : 全く当てはまらない

「サミットに参加して最も印象に残ったことはどんなことですか。理由も含めて書いてください」

(生徒)

- ・ 那由多さんの講演。実際に自分がその立場に立ったとき、とても災害は怖いものだとより実感した。また、すぐに決断する場面に出会ったとき、自分はどうか考えることができ良かった。
- ・ 死と罪悪感と向き合うということと、大震災により、人の性格をも変え、犯罪なども起きてしまうということ。今回は考える時間があったが、いざ自分が同じ立場になったら、ぜったい判断することが出来ないから、すごく良い時間になった。
- ・ 講演では、自分が思っていた地震の被害はとても表面的なもので、本当につらいのは心の傷だということが分かり、とても心に残った。特に人を助けるかどうかという質問のところとても残酷な話だけど、自分にも起こりうる話なので、自分ならどうするかということを考え続けたいと思った。また、学校の発表では、自分たちの学校でもより実践的な避難訓練を行いたいと思った。
- ・ 川から来た津波が、海から来た津波よりも高く速いということが、印象に残った。
- ・ 震災は人間の命や家、仲間を奪い、人の心を傷つけるものであり、今生きている人全員が震災の正しい知識を持つことが大事であると思った。そして様々な状況に応じて冷静に判断し、行動することで、地域の人を引っ張っていけると感じた。そのためにも、事前に地域の人や要配慮者との交流も大事であると思う。
- ・ 雁部さんの発表では、実体験での流された人の話や、その後の人たちの様子などがとても怖さと、そのさびしさを感じ印象にあることと、震災の記憶だけだと苦しい思い出だけになるが、人へ伝えることで、その思い出が情報へ変わることが、防災に対する意識が大変改められました。また、各校での取組なども、防災への対応策として取り入れようと思うことができました！
- ・ 各校の防災に対する取組について聞いたことは良かったと思います。それぞれ各校の実情は違って、それぞれに工夫した取組があった。
- ・ グループワークでの意見交換。他の学校の生徒と交流できる機会は貴重なので、そのような機会が持ててよかった。



- ・実践校の発表で良かったところをグループで話し合い、自分にはない考えを取り入れることができ良かったです。
- ・防災活動に取り組んでいく中で地域の人と交流をはかったり、連携を取ることが大切だと感じました。地域との連携が取れていなければ、高校生がどれだけ取組を行っても、意味がなくなってしまうのではないかと思ったからです。
- ・私は工業高校生なのですが、もし災害が行ったとき、インフラは止まり、生活環境は変わるでしょう。そうしたときに、被災者の方を助けられるような設備を作っていきたいなと感じました。話し合いの中では、工業だけでなく、農業や普通科からの視点も得られ、非常に良い経験になりました。
- ・今までは、語り部さんの話を他人事として考えている部分があったけど、そうではなく「自分事」として考える必要があると思いました。具体的には家族、友人、自分が被災したことを考えようと思います。高知国際高校や大方高校のように、実際に避難訓練（ロープワークや避難所開設訓練）をやったほうが、災害時にぜったい役立つと思ったので、私達の学校でもやりたいと思いました。

（教員等）

- ・講演は大変良く、職場でも共有しようと思います。本校は特別支援学校のため、実践校としては難しいところもありますが、サミットには参加していければ良いと思いました。また、大方高校での取組で、特別支援学校（ろう）との連携もすばらしく、知、肢、病、盲との取組もぜひ検討できればと思います。
- ・雁部さんの講演がとても印象に残った。語り継ぐことの大切さを説いていただき、高校生だけでなく、各世代の知っている情報をつなぐことに生徒が気づける機会となったと期待している。私個人も、リアルな話が聞けて、地震に対して考える視点が増え、学校内でも拳がった防災士の資格取得も検討したい。
- ・講演をしていただいた雁部さんのお話が最も良かった。一方的な講演だけでなく、生徒たちに考えさせるワークショップを通じて、災害を自分ごとに近づけることができたと思います。もっともっとお話をお聞きしたいです。各校の発表も、どこもすばらしい実践ができていました。とても参考になります。高校同士の交流ができているところがあり、高知県津波サミットの地道な取組の成果を実感しました。ありがとうございました。
- ・雁部さんの講演がとても印象に残った。語り継ぐことの大切さを説いていただき、高校生だけでなく、各世代の知っている情報をつなぐことに生徒が気づける機会となったと期待している。私個人も、リアルな話が聞けて、地震に対して考える視点が増え、学校内でも拳がった防災士の資格取得も検討したい。
- ・雁部さんのご講演で投げかけられた「手を差し伸べるか否か」について、小5の雁部さんが命の選択を迫られ、決断したという話に涙が出ました。そのような体験があったとは、想像したこともなかったからです。震災について、まだまだ知らないことが多くあり、そのまま風化させてしまう可能性があるということにも気付くことができました。投げかけに対する答えは出ないですが、これからも考えていきたいと思います。

## **令和5年度「高知県高校生津波サミット」報告書**

発 行 令和6年3月

発行者 高知県教育委員会事務局 学校安全対策課

〒780-0850 高知市丸ノ内1丁目7番52号

TEL : 088-821-4533

FAX : 088-821-4546

